

史泉

第一五号

石浜先生古稀記念特輯号

賀寿の風習について……………魚澄惣五郎 (1)

世界史像における東洋と西洋……………上原 専禄 (17)

「飲膳正要」について……………石田幹之助 (40)

史学関係主要雑誌論文目録…………… (59)

(昭和33年度補遺 昭和34年1〜3月発行分)

史 泉 第一三号 昭和三十三年十二月

イギリスの対十三植民地工業

規制について……今津 晃 (1)

江戸時代における交通と経済発展 (一)

——隠岐の海運業を中心として——

……津川 正幸 (16)

品 部 考 (下) ……江里口隆信 (27)

大阪府南河内郡
道明寺町北条 黒田神社石燈籠とその銘文

……斉藤 孝 (44)

紹介 Howard K. Beale; Theodore Roosevelt and

the Rise of America to World Power

(The Johns Hopkins Press, Baltimore, 1956)

……高橋 章 (54)

史学関係主要雑誌論文目録 (昭和三十三年十一月発行分) …… (60)

史 泉 第一四号 昭和三十四年三月

『歴史と時の流れ』

(関西大学東西学術研究所講演会速記)

アラブ民族運動の特性 ……藤本 勝次 (1)

アメリカ世界政策の伝統 ……今津 晃 (9)

中共とソ連 ……石川 忠雄 (21)

——中共の対ソ主体性——

日本史 講座(5) 律令時代末期の国家と文化(その四) ……横田 健一 (37)

史学関係主要雑誌論文目録 (昭和三十三年十二月発行分) …… (63)

行步如鸞不杖藤
悼亡聊賦兒孫孝
墜簡流沙來未亡
新成覺舍秋晴倚

儒林点将意飛騰
隱市同塵著述增
方言別国愈堪徵
君室宜居最上層

敬寿

石浜博士七十

晚

吉川幸次郎恭賦

沈潜研覈史兼經
西夏言文探秘奧
喬松翠柏迴地苑
欽羨古稀高臥処

大隱市中名姓馨
東遼碑碣闢幽冥
明月清風入戶庭
天涯一点爛奎星

石浜大壺先生古稀寿詞

高田楷菴

あとがき

◇本号は云う迄もなく石浜先生の古稀記念号であるが、本号に特輯された原稿を見るにつけ、石浜先生がいかに学界に於いて、大きな足跡を残していられるかが、想像されるのである。而も石浜先生が単に古事来歴的歴史家ではなく、その知識のいかに多方面にわたっているか、又いかにその思想の深遠であるかが今更乍ら考へさせられるのである。石浜先生の古稀をお祝いして、本学の魚澄先生が国史の立場から、上原専祿教授がその大なるスケールのお話し、これは勿論西洋史の立場からであるが、石浜先生の東洋史の立場に対して、世界的な疑問を提出されたものであった。つゞいて石田幹之助先生のきはめて専門的なお話しは、中国そのものの在り方がいかにむづかしいか、又東洋そのものの内面的な構造論かと聞きなされたのであった。ともかく石浜先生の頭の中の思想がこんな形で出てきたのであるうか、或は石浜先生をめぐると、又古稀に至る迄の交友の關係、これが世界的な課題として提出された気がする。歴史は多難である。石浜先生のような老大家にして今日に尚問題を吾々に残して行かれるのであらう。併し吾々は未だ石浜先生のスケールに迄は行けない。たゞ石浜先生のより長い長寿

をお祈りして、問題の解決の糸口を吾々に示し下さることを切に希望する次第です。

◇本号は石浜純太郎教授の古稀を記念して、講演会を開いた時の速記録を基にして、編集したものである。続いて巻頭の記念講演をなされた魚澄惣五郎教授の古稀を迎えて、同様な行事が行われるべき筈のものであったのであるが、今にして本号のお祝いを申しあげている人の方が先に亡くなられて、全く順序が逆になって了った感がある。併しながらこれも天の配剤で致し方ないのであらう。吾々としては矢張り事の順序に従って、同様に今は亡くなられたとしても、魚澄教授の古稀を記念し、又教授の遺徳をしのんで、本号と同じ要領で史泉を出したいと思っている。因みに史泉という文字を見るとき先生の温厚な風格が優雅な筆致の上に偲ぶるのを思うとき、次号に於いては是非先生の恩徳の一部でも、又片鱗でもかざることが出来れば幸だと思っている。

◇更に本号よりその編集を筆者にまかされたのであるが、何分未熟なので、一寸不安な点も感じないわけではないのであるが、又それなりに抱負を持ってやって行きたいと思っている。関西大学の史学科の中八割迄が国史専攻なのであるが、世界史の動向は国史一点張りではない訳なのであるから、西洋史・東洋

史の方のバランスをも考えて、学生諸君がもう少し多く西洋史・東洋史の方に傾いてくれることを切望している次第です。その点の史泉によって一寸でも効果のあるようなものにしたいと思っておりますが、どうでしょうか。

◇尚本年度は本学の史学科設立十周年を迎えているのですが、又十一月末か十二月初めに毎日新聞の講堂で講演会を企画しているが、本年のは例年より盛大に、卒業生、在校生一同が集って新制大学設立十周年の意味をも含めて、又今後の関大生のよりよき発展のために何か役に立つ行事を行いたいと思っております。

史泉 第一五号(隔月刊)

百円 千八円

昭和三十四年七月一日発行

大阪府吹田市千里山

編集兼 発行所 関西大学史学会

振替大阪二六〇一六番
代表者 三上 諦 聴

印刷所 大宝印刷株式会社
京都市南区東九条西岩本町八

魚澄先生古稀記念国史學論叢

B5版 八五〇頁 頒価二、五〇〇円 送料一〇〇円

序に代へて

魚澄先生略年譜并著作目録
中世港町における航運活動
高野山領備後尾道を中心にして

高野山御手印縁起について
大阪の洋学―その勃興期の様相―
続日本紀に表れた対蝦夷政策―時代的変遷について―
生成過程における家塾と藩学との関係

和泉大野寺土塔原形考
高野山領紀伊国荒川荘
初期条約改正史上におけるジュ・ブスケの寄与
下野日本の所在地考
中世日本における禪の二潮流について
南北朝の動乱を契機とする武士団性格の變化

班田圖と条里制
狭山藩の家中騷動
家光の大名統制について
広島藩の商業統制
朴金山―東北地方金山経営の原型―
土井藩の農兵―日本軍隊生誕期の一考察―
宿駅の宿という称呼について
近世大阪における証券市場の展開
水無瀬の庭園について
金峰山の研究―金峰山創草記について―
近世封建貢租に関する一考察―貨幣地代の成立過程―
中世荘民の生活―和泉国日根荘について―

「閭重富」小論
延喜式記載の土器
坂上七名と平野の莊園
承和三年の諸古縁起について
生玉法案寺
鎮西奉行についての一・二の考察
非著名寺院の開創伝承―浄土宗の場合―

岡野留次郎
青木茂
赤松俊秀
有坂隆道
鑄方貞亮
石川謙
井上薫
今井太郎
梅溪昇郎
大鳥延次郎
荻須純道
河合正治
岸俊男
木村武夫
熊田重邦
後藤陽一
小葉田淳
小林茂
坂本太郎
作道洋太郎
佐々木利三
佐藤虎雄
塩野芳夫
柴田実夫
末中哲夫
末永雅雄
曾根研三
曾田香融
瀧川政次郎
竹内聰三
竹田理三

幕末維新期における岡山藩の兵制改革
樽廻船輸送の海損分担
文政改暦における種物及び油に
関するいわゆる「国訴」について
―近世後期の紋油業の展開と幕府の油業統制(その二)―
五部大乘経と小藏四大部
和銅五年上奏日本紀の存在について
大化前代における美濃について
大垣廻
四天王寺染人の社会的地位
和泉国近木荘
―惣的結合への方向を中心として―
瀬戸内海の古港、備前の牛窓について
兵庫の文庫
防長のおちい達―藩政下次三男の境涯―
田堵の性格について
初期太閤検地の一性格
―天正一年河内加納村水帳について―
初期真宗における門徒名帳の一例
廻漕会社の興隆
並河誠所の学問と実践
―史蹟踏査と建碑の事蹟について―
芦屋市上山―城山遺跡調査概要
表六甲山系高地性弥生式遺跡の一例として―
古代の人名についての覚書
尼崎藩の銀札
藩政改革の一考察―鳥取藩の請免制をめぐる―
大化前代の播磨
宣長村上潔夫と殿村安守
門人村に關する二・三の問題
近世における白山麓の出作り關係史料
―白峰村のむつし文書を中心として―
中世禅僧の宋学観
近世中期における地方商人の生活
―安芸国竹原下市を中心として―

谷口澄夫
津川正幸
津田秀夫
秀氏祐祥
友田孝之助
直木福太郎
永島福三郎
林屋辰三郎
福尾猛市郎
藤井駿
古岡良一
松岡利夫
松岡久満
宮川満
宮崎圓次
宮本又誠
武藤誠
村川弘
村山修一
八木哲浩
山中寿夫
横田健尚
横井良尚
吉田良晶
若林喜三郎
和島芳男
渡辺則文